

西モンゴルの現代社会生活にみるトゥーリ（叙事詩）の語り
—モンゴル国アルタイ山脈のモンゴル系諸集団における調査を通じて—

氏名 斯 琴
千葉大学社会文化科学研究科

1. 神霊に捧げるトゥーリの語り

トゥーリ（叙事詩）の語りは主に聖なる神霊に対する讃美の行為であり、トゥーリの主人公の勇者は物語の世界において英雄的な祖先であると同時に、語り手の世界においても歴史上の祖先たる者であって、トゥーリの内容は祖先の英雄的な業績の歴史である。したがって、昔から、トゥーリの語りは、西モンゴルの社会において、欠かすことのできない重要な存在である。モンゴル口承文芸研究の筆頭に置かれた西モンゴル、なかでも、アルタイ山脈のオイラト・モンゴルの諸集団のトゥーリは学者たちに重要視され、取り上げられてきた。このようなトゥーリの存在は、現在、人々の生活の中でどのように受け継がれているかを、フィールド調査を踏まえて検討したい。

2. アルタイ山脈のモンゴル系諸集団におけるトゥーリのありよう

モンゴル国西部¹のアルタイ山脈地帯での調査は2007年9月1～21日まで、2008年8月21～9月20日まで2回行った。2007年の調査は、モンゴル国西部のホブドとオブスという二つのアイマク（注2を参考）の人々を対象に実施し、ザハチン、ウリヤンハイ、オーロード、ドゥルベド、バイドの4つの集団を中心に調査を行った。2008年の調査は、ホブド・アイマクのブルガン・ソムでトルグート集団をめぐって生活のありようを考察し、語り継がれる伝承に注目した。2回にわたるフィールドワークを通じてアルタイ山脈における様々な集団と触れ合い、叙事詩の伝統を保ってきた世界に臨むことができた。

1) ザハチン集団

マンハン・ソム（村）のザハチンでは、人々はトゥーリの語りに馴染みが薄い。彼らが知っているのは、外国人や研究者たちが尋ねてくるウリヤンハイ人のトゥーリチである。長老は体験譚を聞かせてくれた。

2) ウリヤンハイ集団

¹ モンゴルの西部というのは、ここでモンゴル国の最も西端に位置するバインウルゲイ、ホブド、ウブスといった三つのアイマク（日本の県に当たる行政区分）を指すことにする。モンゴル国では、いくつかの地帯区分があり、その目的によって多少ずれがある。ただし、西部という区分には上記の三つのアイマクは必ず含まれる。

ムンヘ・ハイラハンとドート両ソムはウリヤンハイ人の領域であり、マンハン・ソムからムンヘ・ハイラハンに行く際、筆者はいくつかのウリヤンハイ人の民家を訪れた。有名なトゥーリチ（叙事詩の語り手）の子孫に出会った。

トゥーリの伝統はこれらの牧民の生活から遠ざかっているように思われる。また、長老たちに日常生活のなかでのアルタイ・エゼンに対する信仰行為を語ってもらったほか、自分の経歴などを語ってくれた。若手のトゥーリチは小学校の先生を勤める傍ら、伝統演芸の伝承者として演芸センターのトゥーリチで活躍している。

3) オーロド集団

エレデンブリン・ソムで、13 アルタイに数えられるツァンブガル山をヌトックのシンボルとして参拝するオーロド集団が暮らす。エレデンブリン・ソムで出会った人たちは信仰的な目的でトゥーリの語りを聞いたことがない。中心地の文芸団などの社会的な文芸演出でトゥーリの語りを鑑賞したという。

4) ドゥルベド集団

オブス・アイマクのトゥルゲン・ソムにおけるドゥルベド人の新築祝いに参加した（写真 1）。祝いに参加した人々は、争って次と次に民謡を歌って、酒碗を回した（写真 2）。そして、特に男性は誰でもユルールができるのが当たり前で、依頼を受けるとたちまち、その語りが始まる。その流暢な語りと意味深い祝福は静かに耳を傾ける人々に感激を与えた。

写真 1 新築祝いの参加者



写真 2 新築祝いの宴会



ドゥルベドの人たちは、両親およびヌトックのエゼンであるアルタイを民謡の対句として歌い表している。人々は日々の生活のなかで、このエゼンを拝んで願いを伝える行為について争って語っている。

5) トルグード集団

2008 年、筆者は、いわゆるトルグートの地域のブルガン・ソムで人々の昔語りを聞き、口承文芸のありようを確かめた。昔、アルタイのエゼンをなだめるため、ウリヤンハイ人のトゥーリチを呼んで、トゥーリを語ったことが、ある長老の記憶からよみがえった。現

地では早くから、トゥーリチは不在になり、その語りに触れる機会が失われたが、長老の生涯の体験談は近隣の若者の間でも広く知られている。そこで、筆者は人々の話からノースタイ、ヘムチグ、ウルムジ、ドマ人といたったたちが物事を知っている人として知られることがわかった。そして、これらの人たちは人生の体験譚や歴史人物に関する言い伝えなどを語り、老若男女を問わず口口に言う。こうした情報を辿って、筆者はノースタイ、ドマを訪ね、その語りを聞かせてもらった。

6) 伝統文化の保護・援助プログラムのコンサート

モンゴル国における、西部の中心地とされる、ホブド市で伝統演芸の弟子入り報告チャリティーコンサートを見た。このコンサートはモンゴルとスイス両国の共同で実施されている、伝統演芸保護のプロジェクトのプログラムである。プロジェクトは2006年から実施され、モンゴル国西部のホブド、バヤンウルギ、オブスという3つのアイマグにおける諸集団伝統演芸の系譜の、自己申告による発掘が行われた。そして、自己申告があれば伝統演芸として認定して、弟子を公募した。認定された伝統演芸の師匠たちは、弟子を取って後継者を育てている。伝統演芸という幅広いテーマの下でアラディン・ド（民謡）、ユルール（祝詞）、マグタル（讃歌）、ホーム、楽器演奏、民間舞踊、トゥーリの語りなどが報告されている。特に、トゥーリの語りは最も重要視され、ウリヤンハイ、ドウルベド、バイドの系統の語り手たちがそれぞれ弟子を育てている。ウリヤンハイ人のセセルは最も年配のトゥーリチとして尊敬されている。セセルの話によれば、彼はバリエル系統のトゥーリチである。このほか、上述したアビリミデ系統のトゥーリチがおり、アビリミデとウルトナストという兄弟のトゥーリチの子孫に受け継がれている。アビルミデの息子であるバラドンドルジはホブド市劇団でトゥーリチを勤めており、今回のコンサートで弟子と共演した（写真3）。これに加えて、バヤンウルギのウリヤンハイ人であるサムジドは舞踊の師匠だが、「ハリキラ・ハラ・バートル」というトゥーリを語ってくれた。

ドウルベドとバイド集団のトゥーリチは昔から有名で、そのなかでパルチンというトゥーリチは広く知られていた。その後、後継者が見られなかったが、今回のプロジェクトによってパルチンの子孫が後継者として育てられている。彼の師匠に当たるトゥーリチは昔からパルチンの語りを聞いて、トゥーリの語りを習った人である。この師匠の話によれば、ドウルベドとバイドのトゥーリの語りはほとんど同じなので、ドウルベドとバイドの若手のトゥーリチを一緒に育てているという（写真4）。

写真 3 劇団のトゥーリチ（右）と弟子



写真 4 ドゥルベドとバイドのトゥーリチたち



3. 終わり

筆者はトゥーリの語りをコンサートの素晴らしい舞台上で鑑賞して、演芸的なイメージを強く受けた。そして、こうした公演の場で伝統演芸の存続が、地元の人々に宣伝されていることから、その存続の危機が噂され、生活基盤において精神的な拠り所を果たしてきた口頭伝承の姿は舞台演芸に細々と変わっていることに気づく。トゥーリは伝承を支える背後の生活において存在が危うくなっているようである。だが、伝統演芸としてプロジェクトの項目に置かれる民謡、ユルールなどの口承文芸は、民間生活においてまだ保たれ続けている。

モンゴル口承文芸研究の筆頭に置かれた西モンゴル、なかでも、アルタイ山脈のオイラト・モンゴルの諸集団のトゥーリは学者たちに重要視され、取り上げられてきた。かくして、現代社会において伝統文化の保護・援助プログラムが行われ、トゥーリは最も注目されている項目である。だが、トゥーリの神髄は生活のなかで広く伝えられる傾向は見られない。トゥーリの語りの本質的な意味は長老たちの記憶に温存されている。